

社 説

小林防火服(株)の創業一五〇年を祝う
企業の発展、企業の寿命、存続のむずかしさ
感銘した小林寛治郎元小林防火服専務取締役の美学

小林防火服(株)が別稿のとおり、この度、めでたく創業一五〇周年を迎えた。日本の消防業界、防災メーカーとしては最古と思われる。

当社は創業以来、消防の防火服一筋に今日まで歩み、その専門性を活かした防火服の製作に励み、全国の消防機関からは絶大な信用を得ている。

防火服は言うまでもなく、猛火、灼熱の火災現場で、その活動の安全を守る最も重要な装備である。その安全性は常に求められるものであり、防火服の性能、使い勝手は絶えず追求されてきている。

日本の消防業界もかつてはそれぞれの業種に於て、専門性があった。消防ポンプでも消火器でも消防ホースでもその道一筋という感があったが、今日の業界の姿を見ると、その専門のみのメーカーも少なくなり、経営上の理由や、今後の企業の拡張、発展を思い多角的に各種機器を取り扱う会社が多くなってきている感がある。いわゆるデパート化、スーパー！コンビニ化しているとも思われる。

今日の社会の変遷、技術の改新を鑑みると、次から次へと新しい物が出現している。これは特に今日のIT産業では顕著であるが、今や車の運転でも自動化が進められている。

以前に「企業三十年説」なる言葉が流行った。これは新しい製品がほとんど開発され社会に流通していく中で、かつてのものは淘汰され、なくなっていくことを意味するものであるが、確かに町中の

商店を見てもかつて普通にあった商店が姿を消していくのも珍しくはない。

スーパーやコンビニに押されて町の商店街からは八百屋、魚屋が姿を消しつつあり、本屋も通販、スマホ等の影響が見かけなくなった。更に一般の写真屋も大量販売の影響か、なくなってきた。

このような社会の中で、その専門性と歴史を積み上げていくのは至難の技である。小林防火服(株)のようにその専門性と長い伝統を今日まで受け継ぎ発展させてきたのは並大抵のことでは成し得ない。

消防業界も他の自動車メーカーや食品メーカー、薬品メーカーあたりと比べ、その規模は大きくはない。消防業界に携わる人達は、その利益を追及するというよりは、我々は社会の安全への貢献の一助になればという自負心の方が強いのではない。

また、規模がそう大きくはないだけに所謂同族会社も多い。この同族会社は親族一同が一致団結して先代、先々代達が残した家業を立派に受け継ぎ発展させていこうという利点もある。

反面、同族間の親族争いによって組織、会社が消滅するケースもある。数年前になるが、戦前からあるその業種では名門企業であった会社が組織を解散し閉社した。

その会社は先々代が戦前に会社を興し、女婿が二代目となり、会社を一層盛り上げた。そして、その子息が三代目を受け継ぐ時に問題が生じた。

先々代には娘が三人いた。その長女の夫が二代目になったわけであるが、先々代が生前に会社の株券を二人が平等に分けるよう遺言した。これも親心であり、三人が心を一つにして会社を盛り上げてくれるであろうという期待感が多大にあった。悲劇が起つたのは二代目社長が亡くなった後に生じた。下の二人の妹達が組んで会社を畳んでその資産を分けてしまおうということになった。妹二人の合わせた株券は三分の二になる。

双方が弁護士を入れて裁判沙汰になったが、法的には三分の二の株を取得している妹達の勝利となった。会社組織が経営不振になって倒産、閉社する場合は数あるが、このようなケースは誠に勿体なく、地下に眠る先々代、先代の嘆きは計り知れないと思える。

小林防火服(株)も同族間の心を一にしての協力、扶け合いが今日まで至っており、現在は同族以外の社員も多数活躍しているが、社の雰囲気も家庭的で社員も生き生きしている。

ここで感じたことは同族の協力、情ということであるが、当日の創業一五〇周年には退職した先代の小林虎太郎社長の弟であり、今の小林寿太郎社長の叔父に当たる小林寛治郎氏も出席したが氏の生き様、行動の美学に感ずるものがあった。

寛治郎氏は現役時代、兄虎太郎社長の下で営業面で大活躍、社の今日の発展に多大な業績を残した。現社長の寿太郎氏が社長に就任する時点で、きれいに身を引いた。

寿太郎新社長の力量を信じ、自分がいてはもし足を引っ張ることがあってはならないと思った。その後、相談役等にも就かず一切から退いた。ここに男の美学なるものがあった。会社を存続させるヒントもこの辺りにあると思える。